

中国語母語話者における日本語可能表現の習得について

— 無対動詞の有・無標識可能表現に着目して —

関 承

博士課程後期

広島大学大学院 国際協力研究科 教育文化専攻

〒739-8529 広島県東広島市鏡山1-5-1

kyo.gc@hotmail.co.jp

中国語母語話者における日本語可能表現の習得について

— 無対動詞の有・無標識可能表現に着目して —

関 承

博士課程後期

広島大学大学院 国際協力研究科 教育文化専攻

〒739-8529 広島県東広島市鏡山1-5-1

kyo.gc@hotmail.co.jp

はじめに

現代日本語における可能表現⁽¹⁾の表現形式には、いくつかの形があり、渋谷 (1993: 6) は次のように示している。

- (A) 可能動詞：書ケル・見レル
- (B) 動詞未然形+助動詞「(ラ)レル」：(書カレル)・見ラレル
- (C) デキル・名詞+デキル：勉強デキル
・名詞+ガ+デキル：勉強ガデキル
・動詞連体形+コトガデキル：勉強スルコトガデキル
- (D) 動詞連用形+ウル・エル：勉強シウル・勉強シエル

上のとおり、現代日本語の主な可能表現は(A)と(B)のように「(ラ)レル」の形を取るか、(C)のように「デキル」の形を取るか、(D)のように「ウル・エル」の形を取る。

ところが、市川他 (2010) などの教師用指導書には、自動詞の「聞こえる、入る、見える、分かるなど」も可能の意味を表すことがあると書かれている。可能表現の表現形式を使わず可能の意味を表せる自動詞と自動詞文、つまり標識のない可能表現が存在することになる。このような自動詞や表現に関しては、ヤコブセン (1989)、乾 (1991)、青木 (1997, 2008)、長友 (1997a, 1997b)、張威 (1998, 2012)、龐黔林 (1999)、都築 (2001)、張麟声 (2001)、王忻 (2006)、大崎 (2005)、呂雷寧 (2007, 2010)、姚艷玲 (2006, 2008)、楠本 (2009)、大江 (2010) などの先行研究がある。そして、その自動詞や表現を、乾 (1991) は「無意志主体可能動詞」、張威 (1998, 2012) は「結果可能表現」、龐黔林 (1999) は「可能動詞的ニュアンスを伴う自動詞」、

都築 (2001) は「可能の意味を含む自動詞」、大崎 (2005) は「自動詞可能」、姚艷玲 (2006, 2008) は「無標(不)可能文」、呂雷寧 (2007, 2010) は「無意志自動詞表現」、楠本 (2009) は「無標可能表現」、大江 (2010) は「無標識可能」と呼んでいる。本稿では、標識上より明確に表現できるように、有標識動詞による可能表現を「有標識可能表現」と称し、無標識動詞⁽²⁾による可能表現を「無標識可能表現」と称することにする。

中国語母語話者にとって「有標識可能表現」は習得しやすく、「無標識可能表現」は習得しにくいという予測が記述的文法研究 (張威 1998, 張麟声 2001, 王忻 2006, 楠本 2009, 呂雷寧 2010 など) によってなされ、これまでもその予測を検証する習得研究がいくつか行われている (小林 1996, 封小芹 2007, 楊彩虹 2007, 王怡韓 2012, 関承 2012, 2013a, 2013b)。しかし、これらの研究は習得過程には着目しておらず、有対自・他動詞⁽³⁾に重点を置いているものがほとんどである。

本稿の目的は、以上の観点から、中国黒竜江省のA大学外国語学院日本語学部で日本語を学ぶ中国語母語話者を対象に行った可能表現の習得状況を探るアンケート調査をもとに、無対動詞の有・無標識可能表現に焦点をあて、その習得の状況と過程を解明する。そして、習得を容易・困難にさせている要因を明らかにすることにある。

1. 無対動詞の可能表現に着目した習得研究の必要性

都築 (2001) では、自動詞を「可能の意味を含む自動詞」か否かで分類し、表1⁽⁴⁾のように3つのグループに分けている。

表1. 都築 (2001: 229) による自動詞の分類

	自動詞の下位分類	特徴	例
1	可能形にできる自動詞	意志性がある	会う, 上がる(B), 遊ぶ, 集まる(B)等
2	可能の意味を含む自動詞	潜在的意志性がある	合う, 上がる(A), 開く, 温まる, 当たる(A), 集まる等
3	可能形にできず, 可能の意味も含まない自動詞	意志性がない	遭う, 飽きる, 呆れる, 明ける, 余る, 改まる等

そして都築(2001)は、「可能の意味を含む自動詞」は2グループに属する。ただし、表1の3つのグループは、次のように区分することもできると述べ、この場合、無意志動詞の有対自動詞が「可能の意味を含む自動詞」に相当すると論じている。

自動詞の下位分類：

1. 意志動詞
2. 無意志動詞の有対自動詞
3. 無意志動詞の無対自動詞

しかし、「分かる」と「降る」は無意志動詞であり、無対自動詞でもある。次の例文(1)と例文(2)を見てみよう。

(1)辞書を引かないと、日本語の新聞はほとんど分からない。

(中国語訳：如果不查字典的话，日语报纸几乎看不懂。)

(2)明日はいい天気なので、たぶん雨は降らない。

(中国語訳：明天是好天气，大概不会下雨。)

例文(1)の「新聞は分からない」は「新聞の内容が読み取れない」ということを意味しており、例文(2)の「雨は降らない」は「雨が降る見込み(可能性)がない」ということを言っている。この場合の可能は「語彙的可能」⁽⁵⁾を示す。両方とも無標識で可能の意味を表すが、その中国語訳⁽⁶⁾には可能標識(下線部)⁽⁷⁾が見られる。このような特徴を有する無対自動詞は「分かる」と「降る」だけとは限らず、無標識可能表現には有対自動詞のみならず、無対自動詞も含まれている。

また、早津(1995:192)では調査対象とする動詞の総数が多くなるほど、その中に占める自他対応をなす動詞対の割合が低くなるとし、次の表2を作成している。

表2. 動詞の総数と自他対応をなす動詞対の数

	動詞数	自他対応をなす動詞対の数	割合
早津(1987a)	約740語	約220対(440語)	59.5%
『当用漢字音訓表』	約1040語	約290対(580語)	55.8%
『角川類語新辞典』	約3540語	約590対(1180語)	33.3%
『分類語彙表』	約4800語	約420対(840語)	17.5%

この表2から、動詞の中に無対自・他動詞はかなり多く、日本語の教育や学習において重要な位置を占めていることが分かる。しかし、これまでの習得研究では、無対自・他動詞は関心の対象外である。有対自・他動詞と無対自・他動詞はその意味的な分類領域をかなり異にしている(早津1987b, 1995)ので、無対自・他動詞に絞る可能表現の習得研究は必要不可欠である。

2. 調査方法

2.1 調査対象者及び期間

調査の対象者と期間はすでに関承(2013a)で紹介しているが、ここでもう一度簡単に紹介する。2012年5月22日から6月18日まで中国黒竜江省のA大学外国語学院日本語学部で日本語を学ぶ中国語母語話者一、二、三年生を対象に、可能表現の習得状況を探るアンケート調査を実施した。一年生49名、二年生63名、三年生58名、合計170名の学生から協力を得ることができた⁽⁸⁾。対象者全員に日本滞在経験はなく、日本語を学び始めたのは大学に入学してからである。可能表現は、4.2で述べるように一年生の前期に学ぶ。調査時点はそれ以降なので、可能表現は既習項目となる。

2.2 調査計画

3×2の2要因配置を用いた。第1の要因は調査対象者の学年であり、一年生、二年生と三年生の3水準であった。第2の要因は可能標識の有無であり、有標識と無標識の2水準であった。第1の要因は対象者間変数、第2の要因は対象者内変数である。

2.3 調査項目と手順

調査表は論文末の資料に示したとおりであるが、3つの項目からなる。1つ目は、対象者の属性に関わる質問項目である。2つ目は、学生の習得状況を調べたり誤用を収集したりするための調査文に関わる質問項目である。3つ目は、その回答に関する自由記述と連絡先である。

1つ目の対象者の属性については、学年、民族、性別、年齢、日本語学習歴、来日経験、日本語能力試験の合格級、日本語以外の外国語能力を尋ねた。

1つ目の学生の習得状況を調べたり誤用を収集したりするための調査文については、表3のとおりであり、次の手順で作成した。まず、一年生で習う最も基本的な無対自・他動詞を国際交流基金・日本国際教育協会(2002)の旧3、4級⁽⁹⁾から抽出した。その抽出した無対自動詞については、人間状態、人間行為及び自然現象を表すものに三分した。一方、無対他動詞については、働きかけの過程の様態に注目する動詞が多い(早津1995)ので、分類は人間行為を表すもののみとした。

無標識に関しては、人間状態を表す自動詞である「分かる、慣れる」と、自然現象を表す自動詞である「吹く、降る」とが、ともに可能形と共起せず可能の意味を含意し、無標無対の条件を満たすので、調査動詞として選ばれた。また、有標識に関しては、人間行為を表す自動詞である「走る、眠る」と、同じく人間行為を表す他動詞である「書く、話す」とがともに可能形と共起し、有標無対の条件を満たすので、調査動詞として選ばれた。

表3. 調査文

無対	属性	可能	動詞	調査文
自動詞	人間状態	無標識	分かる	辞書を引かないと英語の新聞はほとんど分からない。
			慣れる	どんなに長く住んでいても、ここの生活には慣れない。
	自然現象		吹く	明日はいい天気なので、たぶん強風は吹かない。
			降る	日照りが続いているので、たぶん大雨は降らない。
他動詞	人間行為	有標識	眠る	外がうるさいので、眠ろうとしても眠れない。
			走る	赤ちゃんなので、まだ走れない。
			書く	中国語を勉強したことがないので、漢字が書けない。
			話す	私は中国人ではないので、中国語が話せない。

(枠が付いている動詞は旧3級の動詞である)

次に、選ばれた8つの動詞を用いた調査文を表3に示しているように8文作成した。それぞれの調査文は有標識可能表現が4文、無標識可能表現が4文である。そして、これらの調査文を日本語母語話者⁽⁹⁾に確認してもらい、自然な日本語表現と見なされるものを本調査の調査文とした。

3つ目の自由記述と連絡先については、対象者がどのような基準で答えているのか、またどのような疑問があるのか、必要な情報として記述してもらった。記述された内容が判明できない場合を考慮して、直接連絡が取れるように連絡先をも記入してもらった。

3. 結果と分析

本調査についての分析対象は調査対象者が答えた正用のみである。無答と誤用については分析対象から除外した。調査文4文ずつになっている有標識可能表現と無標識可能表現の用法の中で、3文が正しければ、その用法が習得されていると判断する。

図1に調査対象者一、二、三年生における有・無標識可能表現の平均正用数及び標準偏差を示す。

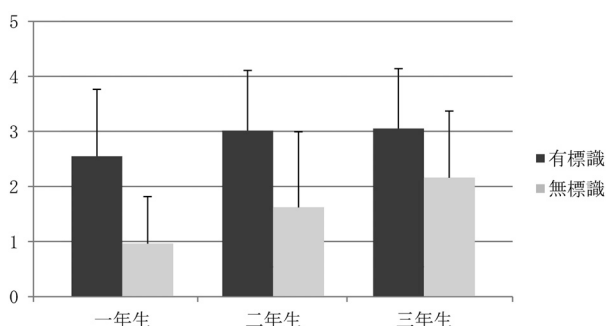


図1. 各学年における有・無標識可能表現の平均正用数及び標準偏差

3 (調査対象者の学年：一、二、三年生) × 2 (可能標識の有無：有標識と無標識) の2要因分散分析をANOVA4で行った。その結果、調査対象者の学年の主効果 ($F(2,167) = 13.251, p < .001$) と可能標識の有無の主効果 ($F(1,167) = 121.924, p < .001$) がともに有意であった。

また、調査対象者の学年 × 可能標識の有無に交互作用も有意であった ($F(2,167) = 3.117, p < .05$)。そこで、単純主効果の検定を行ったところ、調査対象者の学年 × 有標識の場合 ($F(2,334) = 3.201, p < .05$) と、調査対象者の学年 × 無標識の場合 ($F(2,334) = 14.723, p < .001$) がともに有意であった。また、いずれの学年においても有標識の方が無標識よりも平均正用数が多いことも分かった (一年生： $F(1,167) = 61.401, p < .001$, 二年生： $F(1,167) = 47.279, p < .001$, 三年生： $F(1,167) = 19.477, p < .001$)。

さらに、調査対象者の学年 × 有標識の単純主効果が有意であったため、Ryan法による多重比較を行った。その結果、二年生 ($t = 2.088, df = 334, p < .10$) と三年生 ($t = 2.208, df = 334, p < .10$) は一年生との間に有意傾向は見られたが、二年生と三年生の間に有意傾向は見られなかった ($t = 0.169, df = 334, n.s.$)。そして、調査対象者の学年 × 無標識の単純主効果も有意であったため、Ryan法による多重比較を行ったところ、三年生と二年生 ($t = 2.521, df = 334, p < .05$)、二年生と一年生 ($t = 2.964, df = 334, p < .05$)、三年生と一年生 ($t = 5.273, df = 334, p < .05$) の間に有意差が見られた。

以上の結果から次のことが明らかになった。

- ①それぞれの学年の平均正用数において有標識可能表現は無標識可能表現との間に有意差が見られたことから、一、二と三年生の学生にとって有標識可能表現は習得されやすく、無標識可能表現は習得されにくいということが分かる。
- ②有標識可能表現に関しては、二年生と三年生における平均正用数がそれぞれ約3.016と3.052に達しており、すなわち調査文4文のうち3文ができてい

るので、習得されていると考えられる。しかし、二年生と三年生は一年生との間に10%水準での有意傾向が見られたことから、一年生にとっては有標識可能表現の習得はそれほど難しくなく、もう少し時間をかけて習得されると推測される。

- ③無標識可能表現に関しては、それぞれの学年における平均正用数の間に有意差が見られ、一年生<二年生<三年生のように学年を追って上達していく様子を表している。しかし、習得は進んでいるとはいえ、三年生になっても調査文4文のうち大体2文しかできていないので、習得されていないと判断される。

4. 考察

今回の調査結果を見ると、有標識可能表現の習得状況は良いが、無標識可能表現の習得状況は決して良いとは言えない。特に、三年生の段階でもその理解がよくできていないことに注意すべきである。以下、この調査結果に基づいて、有・無標識可能表現の習得に影響する要因として、言語転移、教科書と過剰一般化から考察を行っていく。

4.1 言語転移 (language transfer)

第二言語習得研究では、多くの要因から学習者の習得状況を考察している。その1つの内的要因として母語の影響がよく取り上げられる。母語の影響を検討する場合、正と負の転移が考えられる。学習者は外国語を学習するときに、母語が影響するので、目標言語の構造と似ている場合には、正の転移によって習得が容易になる。一方、異なる場合には負の転移によって習

得が困難になるという対照分析仮説 (Contrastive Analysis Hypothesis) がある (Lado 1957)。この仮説を利用して、中国語訳を参考にしながら、母語である中国語が日本語の可能表現の習得に影響する可能性を検討していく。

まず、日本語の有標識可能表現とその中国語訳である表4を見てみよう。調査文「外がうるさいので、眠ろうとしても眠れない」に対応する中国語は可能補語「V不C」の「睡不着」であるのに対し、「赤ちゃんなので、まだ走れない」、「中国語を勉強したことがないので、漢字が書けない」と「私は中国人ではないので、中国語が話せない」といった調査文では、中国語の可能助動詞「会」で表現されている。このことから、日本語も中国語も可能標識を使って主体がある動作か状態を実現できるかどうかを表し、有標識可能表現であることが分かる。このような表現は、目標言語である日本語の構造と類似しているので、正の転移を起こさせ、習得を促進させるものであると考えられる。

次に、日本語の無標識可能表現とその中国語訳である表5を見てみよう。調査文に可能標識は見られないが、それらに対応する中国語では可能補語「V不C」と「V不了」の「看不懂」と「习惯不了」を使って結果状態の意を表し、可能助動詞「会」を使って推し量る意を表している。日本語の調査文は、この二種の可能の意味を標識を使わず無対自動詞の持つ語彙的な意味で表す。この場合、対照言語学では日本語は可能標識を用いなくても可能の意味を表せると説明され得る。つまり、中国語は有標識可能表現であり、日本語は無標識可能表現であるといったように、両言語における構造の差によって、負の転移が起り、習得を遅延させていると考えられる。

表4. 日本語の有標識可能表現とその中国語訳

調査文	中国語訳
外がうるさいので、眠ろうとしても眠 <u>れ</u> ない。	外面很吵，所以怎么睡也 <u>睡</u> 不着。
赤ちゃんなので、まだ走 <u>れ</u> ない。	他是个刚出生的孩子，所以还不会跑。
中国語を勉強したことがないので、漢字が書 <u>け</u> ない。	没学过汉语，所以不会写汉字。
私は中国人ではないので、中国語が話 <u>せ</u> ない。	我不是中国人，所以不会说汉语。

(下線部は可能標識を表す。以下同様)

表5. 日本語の無標識可能表現とその中国語訳

調査文	中国語訳
辞書を引かないと、英語の新聞はほとんど分らない。	不查字典的话，几乎 <u>看</u> 不懂英文报纸。
どんなに長く住んでいても、ここの生活には慣 <u>れ</u> ない。	不论住多久，都 <u>习</u> 惯不了这里的生活。
明日はいい天気なので、たぶん強風は吹かない。	明天是个好天气，大概不会刮大风。
日照りが続いているので、たぶん大雨は降らない。	太阳一直高高地挂着，大概不会下大雨。

以上のことから、有標識可能表現は早い段階で習得されるが、無標識可能表現はなかなか習得されにくいという点については、母語の影響に起因すると考えることができる。

4.2 教科書の影響

これまで母語転移から習得に影響を与える可能性を検討してきたが、外的要因の1つとして、学習者が使用した教科書の影響を無視することはできない。以下、調査対象者が使用している教科書、すなわち『総合基礎日本語』（1999）ハルピン工程大学出版社を取り上げ、考察を進めていく。

この『総合基礎日本語』を観察したところ、可能表現に関する文法記述は初級用である『第一冊』（一年生の前期教科書）に集中しており、『第二冊』（一年生の後期教科書）からは一切説明されていないことが分かる。『第一冊』の第十課の「文法」（1999:186-188）では、可能表現について次のように記述されている。

一、文法

1. 日语中常用的表示可能的表现形式有以下几种：

① 使用“できる”组成“动作性名词+できる”及“动词连体形（基本形）+こと+できる”的形式。

ここならゆっくり話ができる。

（在这里的话能慢慢谈。）

あした学校へ来ることができます。

（明天能来学校。）

② 用可能助动词“れる”，“られる”分别接各类动词未然形后，组成可能动词。此时，句中的格助词“を”一般用“が”代替。

五段动词未然形+れる一般发生约音变化。

行く→いか→行か+れる→行かれる，可以约音成“行ける”。

読む→よま→読ま+れる→読まれる，可以约音成“読める”。

日曜日なら，私も行かれます（行けます）。

（星期天的话，我也能去。）

日本語を勉強していますね。この本が読まれますか（読めますか）。

（正在学习日语呢。这本书能读吗？）

一段动词未然形・カ变动词未然形+られる。

見る→み→み+られる→見られる。

食べる→たべ→たべ+られる→食べられる

来る→こ→こ+られる→来られる

日曜日だけはテレビが見られます。

（只有星期天能看电视。）

学校の食堂でおいしくて安い物が食べられます。

（在学校的食堂能吃到又好吃又便宜的东西。）

明日来られますか。

（明天能来吗？）

サ变动词“する”的可能形式是“できる”。

お金が無いので、買い物できません。

（因为没有钱，所以不能买东西。）

あなたはこの問題ができますか。

（你会（能做）这个问题吗？）

③ 自动词“見える，聞こえる，分かる，入る”有时也可以表示可能的意思。

ここなら，富士山が見えます。

（如果这儿的话，能看见富士山。）

私の話が聞こえますか。

（我的话能听到吗？（能听见我说话吗？））

日本語訳：一、文法

1. 日本語で主として使用されている可能表現の表現形式は以下のとおりである。

① 「できる」で「動作的名詞+できる」及び「動詞連用形（基本形）+こと+できる」の形式を作る。

② 可能助動詞「れる」「られる」を各種類の動詞の未然形の後につけて、可能動詞を作る。この場合は、文の格助詞「を」の代わりに、「が」を使うのが普通である。

「五段動詞未然形+れる」の場合は普通約音の変化が生じる。

行く→いか→行か+れる→行かれる，「行ける」と約音できる。

読む→よま→読ま+れる→読まれる，「読める」と約音できる。

一段動詞未然形・カ変動詞未然形+られる

サ変動詞「する」的可能形式は「できる」である

③ 自動詞「見える，聞こえる，分かる，入る」は可能の意味を表すことがある。

（日本語訳は筆者が訳したものである）

この『第一冊』の第十課の「文法」では、有標識可能表現から無標識可能表現までの概念が一回きりですべて取り上げられている。しかし、問題点として以下の2点が挙げられる。

1. 有標識可能表現の記述は比較的詳しいものの、無標識可能表現の記述は簡略で、自動詞「見える，聞こえる，分かる，入る」は可能の意味を表すことがあるとしか説明されていない。このような教科書の記述では学習者は無標識可能表現の知識をインプットしにくい。

2. 有標識可能表現の記述では、無対他動詞の「食べる，読む」，無対自動詞の「行く，来る」といった動詞が導入25され、それらを用いた例文も提示されている。そして、同じ第十課の「練習」（1999：203）では、無対他動詞の「話す，書く，作る」，無対自動詞の「歩く」といった動詞も練習項目として出てくる。

一方、無標識可能表現の記述では、「文法解説」のところで「見える，聞こえる，分かる，入る」といった

4つの動詞しか挙げられていない。その4つの動詞のうち、有対動詞は3つあるのに対し、無対動詞は1つしかない。例文を提示する際には、「見える、聞こえる」の例文は見られるが、「分かる、入る」の例文は見られない。さらに、無対自動詞である「降る、吹く」などが既習の動詞であるとはいえ、それらを学習・練習する例文もない。以上のことをまとめると、次の表6になる。

表6. 教科書で導入した動詞

	無対自動詞	無対他動詞	例文	合計
有標識可能表現	行く, 来る, 歩く	食べる, 読む, 話す, 書く, 作る	あり	8
無標識可能表現	分かる	該当なし	なし	1

つまり、有標識可能表現においては例文のある無対自・他動詞を合わせて8つの動詞が導入されているのに対して、無標識可能表現においては例文のない無対自動詞の「分かる」しか見出せず、両者の間にばらつきが大きい。このような語彙的な導入における不均衡性がある限り、学習者の理解と運用に問題を発生させやすい。今回の調査で調べた動詞ごとの誤用率である表7を見てみよう。

表7. 各動詞の誤用率

グループ	動詞	一年生	二年生	三年生
有標識	書く	29%	10%	21%
	話す	35%	21%	14%
	眠る	39%	33%	29%
	走る	43%	35%	31%
無標識	分かる	61%	46%	21%
	慣れる	67%	63%	52%
	吹く	84%	63%	55%
	降る	92%	65%	57%

(枠があるのは教科書で導入した動詞とその誤用率である)

この表7に示している枠のある動詞、すなわち教科書で導入した動詞に注目してほしい。この3つの動詞「書く、話す」と「分かる」の誤用率はそれらに対応するグループの中で未導入の動詞（枠のない動詞）と比べ、学習者のどの段階においても誤用率が比較的低いことが分かる。この結果から、教科書における語彙的な導入の不均衡性は学習者の習得に影響を与える可能性が考えられる。しかし、この点に関しては稿を改めて仮説検証型の研究を行う必要がある。また、外的要因として周囲からのインプットも考えられる。これらの点は、今後の課題としたい。

4.3 過剰一般化 (overgeneralization)

Selinker (1972) は、母語が異なる学習者から同じような誤用が産出されるということは、第二言語には母

語に影響されない共通の言語体系が存在すると考えている。例えば、可能の意味を持つ自動詞表現の習得に関して、中国語・韓国語母語話者を調査・比較した楊彩虹 (2007) の研究がある。この研究では、母語を異にする日本語学習者で、可能形式と共起しない自動詞を可能表現にした誤用が共通的に生じたという結果が出ている。この結果から、無標識可能表現では母語の影響による言語間誤用が常に起こるわけではなく、母語が異なる学習者にも共通に見られる言語内誤用があるということが分かる。過剰一般化とは、後者である言語内誤用の一種であり、ある1つの規則を別の語へも適用できると考え、広く一般化することである (Selinker1972)。

上の4.2で挙げた教科書の記述のように、「文法」の②では有標識可能表現の接辞方法として、可能助動詞「れる」「られる」が取り上げられている。その文法解説と例文を次に示す。

文法解説：

可能助動詞「れる」「られる」を各種類の動詞の未然形の後ろにつけて、可能動詞を作る。

「五段動詞未然形+れる」の場合は普通約音の変化が生じる。

行く→いか→行か+れる→行かれる、「行ける」と約音できる。

読む→よま→読ま+れる→読まれる、「読める」と約音できる。

一段動詞未然形・カ変動詞未然形+られる。

見る→み→み+られる→見られる。

食べる→たべ→たべ+られる→食べられる。

来る→こ→こ+られる→来られる。

例文：

日曜日なら、私も行かれます (行けます)。

日本語を勉強していますね。この本が読まれますか (読めますか)。

日曜日だけはテレビが見られます。

学校の食堂でおいしくて安い物が食べられます。

明日来られますか。

ここに、各種類の動詞の未然形に「れる」「られる」を加えて可能動詞を作るという文法解説がある。そこで、「五段動詞未然形+れる」と「一段動詞未然形・カ変動詞未然形+られる」の接辞方法が取り上げられている。しかし、この2つの接辞方法がそれぞれどのような動詞に使われるのか、またどのような動詞に使われないのかについては言及されていない。

また、この可能の意味を表す「行かれる」「読まれる」に注目してほしい。この2つの表現は古風な言い方として誤っているわけではなく、現在も辞書的な意味では正しい。しかし、現実には「行ける」「読める」のような表現を使うのが一般的である。

3節での調査結果から分かるように、有標識可能表

現は上の2点を可能表現の文法として既習した学習者にとって習得が易しいものの、「書けられない、話せられない、眠れられない、走れられない」を選んだ人がまだ見られる。その選択率を示すと、次の表8になる。

表8. 「られる」を過剰一般化した誤用の選択率

動詞	一年生		二年生		三年生	
	れる	られる	れる	られる	れる	られる
書く	22%		5%		12%	
話す	29%		8%		9%	
眠る	33%		22%		16%	
走る	25%		14%		21%	

(「れる」は「五段動詞未然形+れる」が約音された形を示す。以下同様)

これらの誤用は、いったん有標識動詞に「れる」を付加した後に、さらに「られる」を付加しているものである。学習者は「られる」を代表的な可能標識と思い、それを広く一般化しているからであろう。

また、上の2点のような可能表現の文法を既習した学習者のうち、「五段動詞未然形+れる」の「降られない」「吹かれない」「分かれられない」、「一段動詞未然形+れる」が約音された「降れない」「吹けない」「分かれられない」と「一段動詞未然形+られる」の「慣れられない」を選んだ人が多く見られた。その選択率を示すと、次の表9になる。

表9. 「れる」「られる」を過剰一般化した誤用の選択率

動詞	一年生		二年生		三年生	
	れる	られる	れる	られる	れる	られる
分かる	47%	10%	37%	9%	10%	11%
慣れる	φ	59%	φ	57%	φ	47%
吹く	59%	20%	41%	21%	41%	10%
降る	65%	24%	40%	25%	19%	38%

(「られる」は「五段動詞未然形+れる」と「一段動詞未然形+られる」の形を示す)

これらの誤用はすべて無標識動詞だけで表すべきところを可能助動詞「れる」「られる」の形式にしてしまったものである。誤用の原因として、学習者は無標識動詞が有標識動詞と同様に、それ自体可能の意味を表さないと認識し、有標識動詞の可能形式を作る既習文法規則を無標識動詞にも適用させる過剰一般化が考えられる。

以上で述べたことから、無標識可能表現の習得が有標識可能表現の習得よりも難しいのは、有標識可能表現の文法規則の過剰一般化による誤用が多いためだと考えることができる。

5. まとめ

本稿では、中国語母語話者一、二、三年生を対象に

無対動詞の有・無標識可能表現の習得状況と習得過程を探るアンケート調査を行った結果、次のことが明らかになった。

- ①一、二と三年生の学生にとって有標識可能表現は習得されやすく、無標識可能表現は習得されにくい。
- ②有標識可能表現の習得は一年生にとってもそれほど困難ではなく、二年生からは容易になる。
- ③無標識可能表現の習得は学年が上がるにつれて進んでいるとはいえ、どの学年の学習者にとってもまだ困難である。

そして、これらの調査結果に基づいて、とりわけ言語転移、教科書と過剰一般化が習得にどのような影響を与えているのかを考察してきた。その結果、明らかになったことをまとめると、次の表10になる。

この表10から分かるように、言語転移と教科書と過剰一般化が共に習得において促進・助長を生む要因にもなり、また遅延・阻害を発生させる要因にもなりうるのである。

表10. 習得に影響する要因

	有標識可能表現	無標識可能表現
母語と目標言語	構造的に近い	構造的に遠い
教科書の問題点	記述が詳細 動詞の導入数が多い 例文が多い	記述が簡略 動詞の導入数が少ない 例文が少ない
過剰一般化による誤用	数が少ない	数が多い
影響	習得を促進・助長させる	習得を遅延・阻害させる

注

- (1) 本研究では、主体がある動作(状態)を実現できるかどうか、あるいはある事態の実現する見込み(可能性)があるかどうかを形態的・意味的に表すものを可能表現という。
- (2) 本研究での有標識動詞とは、標識を使って可能の意味を表す意志動詞を指し、無標識動詞とは、標識を使わずに可能の意味を表せる無意志自動詞を指す。
- (3) 日本語の動詞には自動詞と他動詞が形態的・意義的・統語的に対応するものもあれば、対応しないものもある。その対応し合う動詞は「相対自動詞、相対他動詞」(寺村 1982)、「有対自動詞、有対他動詞」(早津 1987b)と呼ばれ、その対応し合わない動詞または対応する動詞を持たない場合は「絶対自動詞、絶対他動詞」(寺村 1982)、「無対自動詞、無対他動詞」(早津 1987b)と呼ばれている。本研究では早津(1987b)の呼称に従う。
- (4) 表1は都築(2001:229)における表2である。
- (5) 張威(2012)では、有対自動詞のもつ語彙的なレベルでの可能を「語彙的可能」と呼んで、この「語彙的可能」を特定の構文要素の共起や文脈支持などがなくても可能の意味が成立するものと定義している。本研究はこの定義に従い、無対自動詞が無標識で表す可能にも、「語彙的可能」がある。
- (6) 本稿でのすべての中国語訳を広島大学で留学している中国語

母語話者10名に確認してもらった。

- (7) 中国語では可能を表す標識として可能助動詞「能, 会, 可以など」と, 可能補語「V+得/不+C, V+得/不+了など」とが用いられる。本研究では, これらの標識を使って可能(性)を表す表現を可能表現と見なす。
- (8) 三年生の58名は回答が不適切な5名の参加者を除外した人数である。また, 四年生は就職活動に参加していたり, 卒論を執筆していたりしたため, 四年生向けの調査を実施することはできなかった。
- (9) 2010年からは新しい日本語能力試験が導入された。旧試験では, 試験に出る漢字や語彙, 文法項目のリストが掲載された『日本語能力試験出題基準』が出版されていたが, 新試験では, 『日本語能力試験出題基準』が非公開になっている。また, 旧試験の3, 4級と新試験のN4, N5とは, レベルや試験科目などにおいてほぼ対応している。詳細は日本語能力試験ホームページ<http://www.jlpt.jp/faq/index.html>を参照されたい。
- (10) 日本語母語話者の協力者は30名, 社会人が10名, 大学生が20名である。

参考文献

- 青木ひろみ (1997), 《可能》における自動詞の形態的分類と特徴, 『言語科学研究』3, 11-26.
- 青木ひろみ (2008), 『現代日本語における可能表現の研究』, 麗澤大学大学院言語教育研究科博士論文.
- 市川保子他 (2010), 『日本語誤用辞典: 外国人学習者の誤用から学ぶ日本語の意味用法と指導のポイント』, スリーエーネットワーク.
- 乾とね (1991), 潜在的比較の表す可能の意義について—無意志主体可能動詞の可能の意義—, 『上智大学国文学論集』24, 155-174.
- 王怡韡 (2012), 中国人学習者における日本語無標可能表現の習得に関する研究—この役はあの新人俳優にはつとまらない—, 『日本語研究』32, 1-14.
- 王忻 (2006), 『中国人日本語学習者に見られる誤用の研究—日中言語対照の視点から—』, 外語教学与研究出版社.
- 大江元貴 (2010), 日本語における無意志可能の成立条件について—「られる可能」「できる可能」「無標識可能」の比較—, 第7回筑波大学応用言語学研究会口頭発表ハンドアウト.
- 大崎志保 (2005), 日本語の自動詞による可能表現—動詞制約を中心に—, 『日本語文法』5(1), 196-211.
- 関承 (2012), 中国語を母語とする日本語学習者における可能表現否定形の正用と誤用について—「開かない」と「開けられない」を例に—, 『北研学刊』8, 91-100.
- 関承 (2013a), 有対自・他動詞による可能表現の習得研究—中国語母語話者の場合—, 『北研学刊』9, 76-94.
- 関承 (2013b), 形態的対応が異なる有対自・他動詞による可能表現の習得研究—中国語を母語とする日本語学習者の場合—, 2012年度中日言語文化比較学会口頭発表ハンドアウト.
- 楠本徹也 (2009), 無標可能表現に関する一考察, 『東京外国語大学論集』79, 65-85.
- 国際交流基金・日本国際教育協会 (2002), 『日本語能力試験出題基準 (改訂版)』, 凡人社.
- 小林典子 (1996), 相対自動詞による結果・状態の表現—日本語学習者の習得状況—, 『文藝言語研究言語篇』29, 41-56.
- 渋谷勝己 (1993), 日本語可能表現の諸相と発展, 『大阪大学文学部紀要』33(1), 1-262.
- 張威 (1998), 『結果可能表現の研究—日本語・中国語対照研究の立場から—』, くろしお出版.
- 張威 (2012), 現代日本語の結果可能表現のシンタクスと意味, 『北研学刊』8, 61-77.
- 張麟声 (2001), 『日本語教育のための誤用分析: 中国語話者の母語干渉20例』, スリーエーネットワーク.
- 都築順子 (2001), 日本語の「可能の意味を含む自動詞」に関する一考察—中国語との比較対照において—, 蔡全勝編『日本文化論叢: 第二回日中文化教育研究フォーラム報告書』, 大連理工大学出版社, 221-235.
- 寺村秀夫 (1982), 『日本語のシンタクスと意味I』, くろしお出版.
- 長友文子 (1997a), 可能形の規則による動詞の分類—日本語教育から見た可能表現の研究 (一)—, 『和歌山大学教育学部紀要』人文科学47, 1-8.
- 長友文子 (1997b), 可能形における自動詞と他動詞—日本語教育から見た可能表現の研究 (二)—, 『和歌山大学教育学部紀要』人文科学47, 9-16.
- 早津恵美子 (1987a), 『他動詞と自動詞の対応について』, 東京外国語大学大学院外国語学研究所修士論文.
- 早津恵美子 (1987b), 対応する他動詞のある自動詞の意味的・統語的特徴, 『言語学研究』6, 79-109.
- 早津恵美子 (1995), 有対他動詞と無対他動詞の違いについて—意味的な特徴を中心に—, 須賀一好・早津恵美子編『動詞の自他』, ひつじ書房, 179-197.
- 封小芹 (2007), 可能の意味を含む有対自動詞の受容能力の習得について—中国人日本語学習者の場合—, 『ククロス: 国際コミュニケーション論集』4, 49-63.
- 龐黔林 (1999), 日中両国語の可能表現について—自動詞の可能表現を中心に—, 『神戸女学院大学論集』45, 48-59.
- ヤコブセン, ウェスリー・M (1989), 他動性とプロトタイプ論, 久野暲・柴谷方良編『日本語学の新展開』, くろしお出版, 213-248.
- 姚艷玲 (2006), 有対自動詞による無標可能文の成立条件—<可能>の意味合成のメカニズム—, 『日本語教育』128, 90-99.
- 姚艷玲 (2008), <不可能>の言語化に関する日中両語の対照研究, 日中対照言語学会編『日本語と中国語の可能表現』, 白帝社, 88-110.
- 楊彩虹 (2007), 可能の意味を持つ日本語自動詞の習得—中国語話者と韓国語話者を比較して—, 『言語と文化』1, 51-71.
- 呂雷寧 (2007), 可能という観点から見た日本語の無意志自動詞, 『言葉と文化』8, 187-200.
- 呂雷寧 (2010), 日本語の無意志自動詞表現の性質について—中国語の可能表現との対応関係に関連付けて—, 『日中言語対照研究論集』12, 75-90.

Lado, R. (1957), *Linguistic across cultures : Applied linguistics for language teachers*, The University of Michigan Press.

Selinker, L. (1972), Interlanguage, *International Review of Applied Linguistics*, 10, 209-231.

資料(調査用テスト問題)

一、请回答以下问题：

1. 年級：_____ 2. 民族：_____ 3. 性別：男 / 女
4. 年齢：_____ 5. 你学习日语多长时间了：_____年_____个月
6. 是否去过日本：是 / 否，去过_____年_____个月
7. 持有日语能力测试证书：N1 N2 N3 N4 N5 或者其它日语等级证书：_____
8. 除了汉语，还会什么语言：A 英语 B 朝鲜语 C 蒙古语 D 其它 _____

二、请补全以下句子：

请用○选译正确答案，可多项选译。

当你选译“D”时，请在横线处写下你认为的正确答案。

辞書を引かないと、英語の新聞はほとんど……。 (不查字典的话，几乎……英文报纸。)

A：分からない B：分かれぬ C：分かれぬ D：どれも不可， _____

どんなに長く住んでいても、ここの生活には……。 (不论住多久，都……这里的生活。)

A：慣れない B：慣れられない C：慣れぬ D：どれも不可， _____

明日はいい天気なので、たぶん強風は……。 (明天是个好天气，大概……大风。)

A：吹かない B：吹けぬ C：吹かれぬ D：どれも不可， _____

日照りが続いているので、たぶん大雨は……。 (太阳一直高高地挂着，大概……大雨。)

A：降らない B：降れぬ C：降られぬ D：どれも不可， _____

外がうるさいので、眠ろうとしても……。 (外面很吵，所以怎么睡也……。)

A：眠らない B：眠れぬ C：眠れられぬ D：どれも不可， _____

赤ちゃんなので、まだ……。 (他是个刚出生的孩子，所以还……。)

A：走らない B：走れぬ C：走れられぬ D：どれも不可， _____

中国語を勉強したことがないので、漢字が……。 (没学过汉语，所以……汉字。)

A：書かない B：書けぬ C：書けられぬ D：どれも不可， _____

私は中国人ではないので、中国語が……。 (我不是中国人，所以……汉语。)

A：話さない B：話せぬ C：話せられぬ D：どれも不可， _____

三、请写下你的感想或疑问，我会及时与你沟通！

请留下你的 E-mail：_____。

Abstract

An Acquisition Research by the Chinese native speakers on the Japanese Potential Expressions: Paying Attention to the Marked and Unmarked Potential Expressions of Unpaired Verbs

GUAN Cheng

Ph.D. student

Graduate School for International Development and Cooperation

HIROSHIMA University

1-5-1 Kagamiyama, Higashi-Hiroshima, Hiroshima, 739-8529, Japan

kyo.gc@hotmail.co.jp

In this paper, taking the Chinese Grade 1, Grade 2 and Grade 3 students who learn the Japanese language as the object of the survey, a questionnaire was made about “Exploring the acquisition situation and acquisition process of the Marked and Unmarked Potential Expressions of Unpaired Verbs”. Several conclusions can be got from this investigation:

1. For the Grade 1, Grade 2 and Grade 3 students, it is easy for acquiring the marked potential expressions; however, it is difficult for the situation of the unmarked potential expressions.
2. For the acquisition of the marked potential expressions, it is not so difficult for the Grade 1 students, and it becomes easy from the Grade 2.
3. For the acquisition of the unmarked potential expressions, although there is some improvement with the growth of the school year, it is still difficult for all the students.

According to the investigation results, the factors that influences the easy and difficulty of the acquisition were studied. The results show that “All language transfer and textbooks and overgeneralization can become the factors that help and hinder the acquisition”.